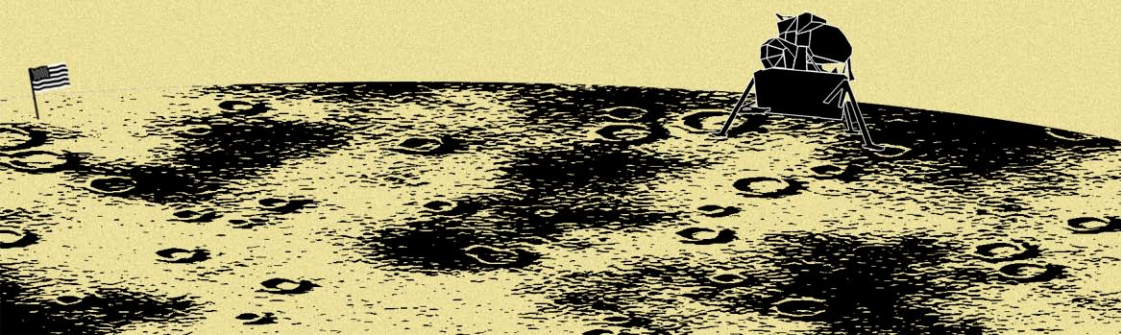


# 月の砂漠に はるばると

-Antiquity mechanism-



*— HERE MEN FROM THE PLANET  
EARTH FIRST SET FOOT UPON  
THE MOON JULY 1969 AD.  
WE CAME IN PEACE FOR ALL  
MANKIND.*

「西暦 1969 年 7 月、我等惑星地球より来たり。  
全人類の平和を希求してここに来たり」

目  
次

一	儚月を臨むブルー・マールブル	3
二	朋に囲む紅桂の宴	12
三	月方浄土と彼の岸边	20

## 一 儂月を臨むブルー・マープル

▼ 宇佐見蓮子 & マエリベリー・ハーン

暦の上でも燕は南に帰り、そろそろ暑さもしのぎや  
すくなるこの季節。講義をサボって静かにそよぐ風を  
堪能しながら、薄く汗をかいたグラスにからんと氷が  
揺れるのを眺めるのも、私の中ではひとつの風物詩。

「夢を見たのよ」

いつもの通り学内のカフェテリアに向かい合わせ  
に座って、ホーキングフレーバーのミルクティーを前  
に、メリーはそう切り出した。

私たちのサークルであるところの秘封倶楽部のマ  
エリベリー・ハーン——通称メリーが、夢の中で『こ  
こではないどこか』を訪れているのは、すでに私、宇  
佐見蓮子との間では公知の事実。

人と妖怪が共に暮らす隔絶されたその地を、私達は  
幻想郷と呼んでいる。

「またいつもの神社？」

「そうじゃないのよ。だからちよつと気になって」

夢の中でメリーの冒険の記録はすでにノート数  
冊分に及んでいて、秘封倶楽部の重要な活動のひとつ  
だった。聞き手としてではあるものの、私も同じよう  
にその冒険を楽しみにしている。

『境界』を見つけたという彼女の異能の目が、夢の  
中ではより幻想的に働いているのではないか——と  
私は推測しているが、真実は定かではない。

「なるほど。それでわざわざ講義抜け出してまで会い  
に来てくれたわけね」

「……もう。蓮子だって人のこと言えないじゃない  
の」

小さく膨れてみせるメリー。これがまた実に可愛く  
て、まあなんといいか最近はこの顔が見たくてサーク  
ルしてるんじゃないかなあ、と思うときがあつたりな  
かつたり。

……ともあれ。これまでメリーが夢の中で訪れた事  
があるのは、確認できる限り幻想郷に限られていた。  
けれど昨夜メリーが見たのは、どうもそうではない夢  
だったらしい。

そこはどこかの片田舎で、時刻は深夜。単線の古び  
た廃駅のベンチに腰掛け、メリーは来るはずのない列  
車を待ちながら、ウサギと話をしたのだそうだ。

「へえ……確かにちよつと幻想郷っぽくないわね」

「わからないわ。場所がいつもの雰囲気じゃなかったって言うだけで、出てきたのは立って歩いて喋る鬼だもの。十分に幻想的よ」

それにしても、駅に線路なんて、これまでの夢には見られない要素だ。手帳を開いてメリーの気分をそがない程度にメモをとりつつ、先を促す。

「で？ ウサギってくらいだから、お餅をつく杵は持ってた？」

「いいえ。なんていうのかしら、制服みたいな恰好だったわ。それで懷中時計をこう、首から掛けて」

まるで不思議の国のアリスだ。

暗黒物質のように黒い髪、<sup>ダークマター</sup>石榴石<sup>ガネット</sup>みたいに赤い眼をして、頭に白くて特徴的な耳をくつつけた彼女（？）

は、錆びついた時刻表を眺めながらメリーに話しはじめた。

なんでも彼女達は、かつて月に住んでいたウサギであるという。はるか昔から月には地上の穢れを嫌って移り住んだ者たちが静かに暮らしていて、彼女もまたそんな月のウサギの一人だ、ということらしかった。「その子たちはね、昔、月の秘密工作部隊だったって言うの。地上と月の戦争で、人間が月を侵略しようとして

してるのを、妨害しに来たんだって」

「……ふむ。戦争に、侵略ねえ」

あまり穏やかではない話だ。

人類として初めて月に降り立ち、人類にとつて偉大な小さな一步を刻んだ人間は、月面に彼らの国の旗を立てた。それは確かに、地上から月への領有宣言に見えたのかもしれない。

事実、その旗を見て月に住む者たちは恐怖し、驚愕したそうだ。

幻想にとつての月は、人間にとつての太陽のようなもの。古く神話や伝承に語られる幻想の地であるはずの月へ、侵攻の旗を掲げて踏み込んだ地上の人間達に、彼等は徹底抗戦を決意した。

そのため、月のウサギたちの中から精銳が選ばれ、地上へと派遣されることになった。決死隊となった彼女達は、幻想の地から外の世界へ踏み出し、地上へ帰還する月着陸船にこっそりと潜り込んで、地上にやってきたのだという。

メリーと会った彼女もその中の一人だったらしい。「よく知らないけど、昔の月着陸計画ってアポロ計画のことでしょう？ 戦争ってこととは違うように思うけど、そういうものなの？」

言葉を切って、ミルクティーに口をつけるメリー。

「……ええと、有人飛行ってことなら有名なのはアポロだけだね。他にもあるのよ」

さてどう説明したものか、と私はメモをとっていた手帳に視線を落とした。記憶を頼りにページをめくり、いつだったかの記録を探る。

「まあ、すごく乱暴に言えば宇宙開発の歴史って、星を標的にしたロケットの射的競争よ。少なくとも単純に、科学的見地と知的興味だけに基づいたプロジェクトじゃなかったはずね。

イデオロギーの対立とか、政治的な思惑とか、そのへんの話をし出すとキリがないけど……誰が少しでも早く、月に近づくか、最初に月にたどり着くか。国家の威信をかけてそのために邁進してた時代があったの」

“——世界の目から見れば、宇宙での一番乗りはすべてにおいて一番ということだ。宇宙での二番乗りは、何事においても二番手ということなのだ。”

当時、宇宙開発を積極的に推進したある政治家が口にした言葉にこのようなものがある。その頃の世相を

実によく表現した言葉だろう。

「だからアポロの他にも月を目指して行われた計画は山ほどあったわ。失敗したものも含めればそれこそ星の数ほどね。本気で先に月に着陸した国がそこを征服できるって思ってた人も、決して少なくはなかったみたい」

それまでお互いに向け合っていたミサイルを、ロケットと名前を変えて空に向けた。20世紀後半の宇宙開発はそれだけのことだったのだとも言う。当時の国家予算の少ない割合をも占めていた計画費用は、軍事分野への転用を意図して振り分けられたものでもあったのだろう。

「月の土地の売買なんて商売もあったらしいわ。確か一番立地のいい静かの海で1エーカー37.5ドル。当時の物価なら4000平方メートルで四、五千円くらいね。お買い得よ」

「……それって安いのかしら。誰も住んでもいないのに、何のために買ったの?」

「その頃は、あと十年もしたら人類が月に移り住んでる未来が当たり前に信じられてたみたいだから」

ちなみに当時、まだ氷に覆われていた南極大陸は誰のものでもないという条約が結ばれていたが、月は宇

宙条約によって国家の所有とはできないというだけであって、個人が所有することに問題はなかったのだ  
そう。

「そもそも月に向けて打ち上げるロケットの名前に、太陽の神様の名前を付けたりするんだもの。侵略の意図がまるつきりなかったのかとは思えないわ」

「——そうなんだ。本当に戦争だったのね」

空になったミルクティーのカップをテーブルに戻して、メリーは頷いた。

「で、夢の話だけど」

「ええ。その子たちは、地上の侵略から、月の幻想を守るために戦ったんだって言っていたわ」

次々と飛来する観測衛星、降下する着陸船、月の砂漠を疾走する月面車。人類の『科学の進歩』が踏み荒らした月からは幻想が失われ、月の住人達はほとんど月の裏側に追いやられていった……らしい。

ここで言う裏側というのが物理的に月の反対側なのか、比喩的な——いわゆる月の幻想郷のようなものなのかははっきりしない。表向き、アポロ計画で人類は宇宙人と巡り合うことはなかったが、もし月面で彼等と遭遇することになっていたら、後年の歴史にはどう記されただろうか。

……ともかく、地上にやってきたウサギたちは、そんな状況を打開するためにただちに作戦を開始した。彼女達はほどなく、人類が月を目指す理由が、国家間の代理戦争だということを知ったという。

完全なとぼちりで自分たちの故郷を踏み荒らされることに嘆き憤りながら、彼女達はそこに付け込んでそれぞれの陣営の対立をあいり、仲たがいをさせ、秘密工作に暗躍した。

有名なアポロ13号をはじめとして、月探査計画にまつわるいくつものトラブルのうちの何割かは、彼女達のウサギの工作員が起こしたものだそうだ。

……けれどそんな工作もむなしく、次々とロケットは打ち上げられた。その頃の月到達計画は、すでに人類の悲願と位置づけられていたから。

「……確かに怒るのにも怖がるのにも十分かしら。誰だっけ自分の故郷がロケットの的にされてちや嫌になるわよね」

月を目指す宇宙開発は、国と国との代理戦争であつただけでなく、科学と幻想の戦争でもあったというところだろうか。

なんとも微妙な気分のため息をつく私に、メリーは小さく首を振る。

「そうじゃないのよ蓮子。その子たちが本当に恐れたのは、もつと別のことなの」

「別のって、どういうこと？」

「……その子たちは、月がなくなってしまうと思ったらしいの」

「月が？」

「人間が、月を残らず地上に持ち帰ってしまうんじゃないかって、恐れていたのよ」

長い耳を夜空に向けて精一杯伸ばし、赤い眼を涙に濡らし、空に輝く月を見上げて。夢の中でメリーに月のウサギはそう語った。

……月を我が物に。月の住人たちは人間達が比喩でなく文字通りそうしようとしているのではないかと、危惧していたらしい。

アポロが地上に持ち帰った月の石は、6回の着陸で総計およそ400 kg弱。他にも無人探査船を含む月探査計画が行われているが、その採取量はせいぜいが数百 g 単位で、この量は別格だ。

月面車を走らせ、研究のために地面を削り岩を砕いて持ち帰るその姿を見て、月のウサギたちは震え上がった。傲慢で強欲な地上人たちは、やがて何十、何百基というロケットで大編隊を組んでやってきて、月を

粉々に砕いて地上に持ち帰ってしまうのだろうと。

「……それは、なんとも壮大ね。できるものならジャイアントインパクト以来の大事業じゃない」

38万4400キロを隔てた四十億年越しの懐旧。年毎に3・8センチ遠ざかる月までの距離を、地上人は必死に繋ぎ留めんと焦がれているのだ――。

……うん。その発想は、どうしようもなく幻想的だ。「ねえ蓮子。アポロ計画つてたしか途中で終わってるのよね。いつ中止になったの？」

「公式には1972年12月。もともとあつた計画のうち、3回の月着陸ロケットが発射されなかったわ」「なら、あの子たちの努力は無駄じゃなかったのね」「どうかなあ……確かに月の有人探査は中止になりはしたけど。実際はその後も宇宙開発つて進んでるからなあ」

それで果たして、実を結んだといえるのか。

いずれにせよ。それと前後して世界構造の変動と共に宇宙開発は大きく減退し、以後数十年にわたって、月は再び未踏の地となる。

「結局、アポロ計画で月を歩いた人類は都合6回の着陸船で12人だけ。……大山鳴動して鼠一匹……にしちやちよつと大きすぎるけど、月のウサギにしてみた



らしい迷惑だったのかもね」

いつの間にか氷のなくなっていたアイスコーヒーを、一息に啜る。空になったグラスをテーブルの脇に追いやって、私はメリーに先を促した。

「で、その子つてのはなんでメリーの夢の中に出てきたわけ？ 歴史の授業の補講でもしに来てくれたのかしら」

「違うわよ。だったら蓮子のほうに行つて貰うようにお願いしてるもの」

「……そんな魅力なお話なら歓迎したいけどね」  
思わず苦笑。

いやまあ、物理屋にとつて興味のあるところ以外の歴史年表などはあまり意味がない……というのが個人的な心情ではあるけれど。

「その子ね、お友達を探してるって言っていたの。同じように月から地上にやってきて、離れ離れになった月のウサギたちに、一目でもいいから逢いたいって」  
「……そっか。寂しいと死んじやうのはウサギさんもおんなじか」

「そうね、蓮子みたい」

「っ、わ、私はそんなことないわよ!!」

まったくの不意打ちで微笑みかけられ、私は椅子を

蹴飛ばして立ち上がつてしまう。慌てて否定したもののどうにも締まらず、さらにメリーの笑いを誘う羽目になった。

ばつの悪さに帽子を引き下げ、メリーから視線を遮つて空っぽのストローをくわえる。

「そうじゃないのよ蓮子。もつと、……切実だったの」  
帽子で塞がれた真つ暗な視界の向こうから、硬い、メリーの声音が響く。

「月のウサギはね、確かには月に住んではいるけど、普通の方法では人間の住んでる地上には降りられないそうなの。」

だから、ロケットを飛ばす地上人のところにやつてくるには、同じようにロケットに乗つてやつてくるしかなかったそうよ。……でも、それからずっと、人類は月に人を乗せたロケットを飛ばさなかったから」

「ああ——」

そうか。

単純な、ことだ。

彼女達は、『決死隊』として、地上にやってきた。それは要するに、もう故郷の月に戻つてこれないという意味だったわけだ。

「その子たちが地上に降りてから何十年も経つてい

て、仲間たちとはもう連絡も取れないんだって。そのはぐれた友達の子も、とつても寂しがりで、怖がりのウサギだったらしいわ。その子と一緒に地上に降りるはずだったそうなんだけど、その前に逃げ出して行方不明なんだって。

きつと今もその事で自分を責めてるだろうから、気にしないでいいって言ってあげたいって。……月に帰れなくてもいいから、せめてもう一度会いたいって、そう言っていたわ」

月の六倍の重力に引かれて自由に飛び上がることもできず、耳を精一杯そばだてて、ノイズだらけの通信の中に、月から響く仲間の声を探し。

三十八万キロの距離を隔てた故郷を見上げ、目を真つ赤に泣き腫らして、懸命に、何度も何度もウサギは跳ねる。

逢いたい、逢いたい、帰りたい。

そう訴え続ける彼女の涙を最後に――

「……そこで、目が覚めたの」

「なるほど、ね」

なんとなくかき上げた前髪をくしゃくしゃといじり、吐息。

中途のままのメモを放って、私は手帳を閉じた。メ

リーの夢はいろいろと興味深いのでこうして記録を取っているが、今日のそれはどうもいつものものとは毛色が違う。

「なんていうか、重いわね」

「ええ……」

わざわざ講義まですっぽかして、メリーが私を呼び出した理由も、きつとこれだ。

自分たちの故郷を守るために、地上に取り残された月のウサギ。――メリーが呼ばれたのは、せめてもの抗議だったのかもしれない。

「……ありがとう蓮子。聞いてくれて」

「ん、そんな、お礼言われることじゃないわよ。聞かせてくれたって言ってるの私の方だしさ」

メリーの表情が少し和らいだので、私も安堵しつつ小さく深呼吸。

「月のウサギか……」

メリーが夢の中で喋るウサギと出会うのはこれが初めてではない。確か前にも、迷路のような竹林で、同じように白兎と追いかけたり追いかけられたりしたことがあったはずだ。

「ひょっとして、その時の関係なのかもね」

「そうね。……もう少し詳しいことが分かれば、教え

てあげられたのかもしれないわ」

どこか残念そうに、メリーは言う。話を聞いているだけの私と、直接会話をしたメリーではやはり感じ方も違うんだろう。

「ねえ蓮子。あの子たちのしたことって、やつぱり無駄だったのかしら」

「……かもね。でも、たぶん違うわ」

何となくではあるけれど、妙な確信はあった。

「あのさメリー、前に話したけど、私の目のこと覚えてる？」

そう言つて、私は自分の眼を指差す。

「え？」

星を見て現在の時刻が、月を見て現在の位置がわかる程度の能力。

それは、月なくして存在しえない異能だ。

「月の幻想は、そんなにヤワじやなかったんじゃないかしら。月のウサギたちの努力をひっくり返して、ね」

“地球は青かった。見回してみても神はいない。”

——世界で初めて重力の支配を脱して空を飛んだ宇宙飛行士はそんな言葉を残したとも言われている

けれど。

21世紀初頭からの月探査計画の再燃によつて、月の裏側に天使の落書きがない、ということまでをも暴露されてなお、月は多くの人を魅了した。

「事実、宇宙飛行士の中には結構な割合で、メリーみたいに夢見がちになつちやつた人もいるみたいなのよ。当時の人たちにしてみれば、宇宙を飛ぶなんてすごいことだし、月に立つて地球を見上げるのは天地がひっくり返るようなことだったのかもね」

「……もう、わたしは別にそんなんじゃない」

ちよつと膨れるメリー。ああ可愛いなあ。

「でも宇宙飛行士なんて、科学の最先端の極致みたいな職業よ？ オカルトとは一番縁の遠い人のはずなのに、公式の通信記録にも結構残つてるのよ、胡散臭い報告がね。」

宇宙人を見たとか、UFOと会つたとか、そういうのならまあ分からなくもないんだけどね……全世界中継されてる通信でサンタクロースを見たつて報告をしたり、地球に戻つてからノアの箱舟を探しに行つちやつたりした人もいるのよね」

古来、月は人を狂わせるとも言ふ。21世紀まで残り続けた月狂条例なんて言葉を引き合いに出すまで

もなく、その幻想は生き残っていた。

ならば、人類史上最も月に近づいた12人の中には、その魔力にあてられてしまった人も少なくないのかもしれない。

「そのせいかどうか分からないけど、20世紀末には人類が月に立ったことを本気で信じていない人たちもいたみたいね」

「そうなの？」

「ええ。アポロが月に着いてから何十年も経つのに、誰も月に行こうとしなかったから。人類の月到達は捏造だ、陰謀だつて説があったみたい。著名な学者の中にも、支持してる人がいたそうよ。」

……ひよっとしたら、それも月を幻想のものにしておきたっていう、月のウサギのささやかな抵抗運動だったのかも」

そういう意味では、月の地を踏んだ12人は、まさしく幻想となったのだろう。

月は妖怪、魔の象徴でもある。

私の眼のような力が、いまだに生き残っていることを考え合わせれば、人間の月侵略は阻止されたのだといってもいいのかも知れない。

「メリー、なんだったら見に行ってみましょうか」

「なにを？」

「月を、よ。うちの大学にもあるらしいじゃない、アポロが持ってきた月の砂。あなたの眼で境界が見えるかもしれないわ」

「もう、蓮子ったら……それで今夜、また故郷を返して、なんて泣きつかれたらどうするの？」

呆れ顔でそう言いながらも、メリーも満更ではなさそうだった。

「よし、決まり。今日の秘封倶楽部の活動は、38万キロの彼方、月世界の境界探索よ！」

帽子をかぶり直し、椅子を引いて席を立つ私に、メリーも立ち上がる。

ふと見上げた秋の空に、右半分の欠けた白い月が浮かんでいた。

(了)

## 二朋に囲む紅桂の宴

▼レミリア・スカーレット&蓬萊山輝夜

他 幻想郷の愉快な人妖たち

よく晴れた夜だった。竹林の四方には無数の篝火が小さく爆ぜ、夜半の月を照らしている。

足元にさあさあと流れる水音は、心地よく耳をくすぐり、涼となって秋を運ぶ夜風を引き立てていた。

川面の上に設けられた宴席に、洋装をふわりとなびかせて舞い降りた吸血鬼レミリア・スカーレットは、口元から小さな牙をのぞかせる。

「ふうん。涼しげでいいじゃない」

「お気に召していただけかしら？」

こたえて悠然と微笑むのは蓬萊山輝夜。

今宵は月下に集う姫君の会食——紅桂の宴だ。

永遠亭の姫君と紅魔館の主の間で、このような場が設けられるのはこれが初めてのことではない。月都万象展で顔をあわせて以来、妙なところで意気投合した二人は、暇を見ては会うようになっていた。

今回は永遠亭がホスト側となり、竹林に紅魔館の面々を招待してのひと時である。

会食の場所は、竹の花畑の傍らに、川床を組んでの趣向を凝らしたものだ。

「今日はどんな素敵なものを見せてくれるのかしら」  
「退屈にならないといいのだけどね」

この宴席、形の上では両者が親交を温めるための会食の場ということになっている。

しかし神社で開かれる宴会の出席率に比べ、席を囲む数はやけに少ない。永遠亭側に座るのは輝夜と永琳だけ。レミリアも連れているのはメイド長のみで、門番はさておき、妹君や友人の知識人の姿もない。

その理由は単純なものだ。

それぞれ月に縁の深い者同士とは言え、かたや月に住まう民、かたや月を仰ぐ夜魔、その在り方は大きく異なる。が、互いに不死を名乗り、部下に従え格調を誇りたい両者にしてみればどちらがより風靡を理解し粹を知るか——それは、譲れない一線であった。

『一番美味しい料理を用意しなさい！ それよりもはるかに美味しいものを味あわせてあげる！』

……などというようなやり取りがあつたかは定かではないが、言わば永遠亭VS紅魔館、月のメニユーVS運命のメニユー対決、というわけなのだった。

この場に集まる者が少ないのも、要は、どちらがより風靡で高貴であるかという子供っぽい意地の張り合いに、快く付き合ってくれる友人がどちらにもそう居ないということでもあつた。

「制限ね。始めましょうか？」

「ええ、そうね」

とは言え、それぞれの主はそんな些細なことを気にもしていない。今日こそは相手を唸らせてやると意気込みもひとしお、自信たつぷりに笑っているのだった。今回のテーマは秋。夏を過ぎ、最初に月を頂いて開かれる酒宴とあつて、お互いにそれに相応しいものを用意してきたようだ。

厳かに会食の始まりが宣言され、まず先手を指すのはゲスト側のレミリアとなる。

「……さて。ホストには敬意を尽くすべきね。咲夜」

「はい」

答えるか否か、傍らのメイドは小さく目礼して主に答えた。瞬き一つの間もおかず、卓の上には精緻な細工を施された切り硝子のグラスと、氷で冷えて汗をか

いた背の高いボトルが一つ出現する。

瀟洒なメイドは澱むことない手つきで主の酒宴の席を整えた。

「どうぞ」

みつつのグラスに注がれるのは、すこしとろりとした琥珀色の液体。それがグラスに移され、ロックアイスの隙間を満たすと、グラスの縁からは馥郁と甘い香りが立ち込める。

「……お砂糖？」

グラスを手にした輝夜が、目を閉じて香を楽しむ。レミリアはそれに満足そうに笑みを見せ、紅い爪でつい、とグラスをつついた。

「ええ。うちの知識人に調べさせたのだけど、秋の酒宴で紅葉狩りだの紅葉酒だなんて言いながら、実際には紅葉を使うわけではないらしいじゃない？ だから用意させたわ。真正正銘、これが紅葉のワインよ」

「紅葉ではなくて、楓<sup>カエデ</sup>ね」

隣に用意された従者の席で、同じようにグラスを手にした永琳が言う。なお彼女の分まで用意があるのは、単に輝夜の使用人ではないのを考慮してのことだ。

「この国では主に観賞用とされるサトウカエデの樹液を集めて、煮詰めたシロップを発酵させたものかし

ら。確かに糖分は十分だから単発酵で済むわね。……  
ウイスキーの香り付けにカエデの炭を使うというのは、聞いたことがあるけれど」

「勿論、今年のカエデを使わせたわよ」

傍らの咲夜をちらと見上げ、ぱたぱたと羽根を揺らして軽く胸を張ってみせるレミリア。メイプルワインにカエデの葉を使う訳ではないので、厳密には吸血鬼の言葉は的外れにしているが、それをあえて指摘する無粋なものはこの場にはいない。

「ふうん……」

白い纖手で静かにグラスを傾け、月の姫はこくりと喉を震わせた。しばし瞑目し、やがて穏やかな笑みと共に唇を開く。

「少し甘すぎないかしら。子供になら好まれるかもしれないけれど。あまりこういうのは風情がないわ」

「それは残念ね。貴腐ワインに並ぶ高貴な甘さなのだから」

レミリアがグラスを掲げると、咲夜が一步進みでナイフを手にした。ぴ、とフレーバーに落とした朱の雫が、琥珀の液体を濃い褐色へと変える。

「紅葉まで独り占めして飲み干すなんて、なんとも吸血鬼らしく欲の深いことね」

「支配者が誰であるかを教えるのは、大切なことよ」  
紅のすべては私のもの、と呟いて、レミリアは静かにグラスを干す。

ほのかな香りを残す空のグラスを卓上に戻し、吸血鬼は小さく唇を舐めた。ほんのわずか、その端から牙が覗くように。

「さて、今度はそちらの番。どんな秋を御馳走してくれるのか、楽しみね」

既に勝ったつもりで腕を組み、傲然と微笑む吸血鬼に、輝夜は袖元で口元を覆い、あらはしたくない、と言つぶやいてみせた。

「催促なんてしなくてもあげるわよ。ねえ永琳」  
「ええ」

月の頭脳の指示に従って、正装したウサギたちが列を作り盆を運んでくる。紅魔館の妖精メイドとは違って、命令があればそれなりに仕事をこなすのだ、と見せ付ける意図もあるのだろう。

卓上に並ぶのは、徳利と杯、そして鮮やかな紅を白の衣で取り囲む皿が一枚と、和の装いだ。

軽く一礼し、永琳が解説をかつて出る。

「趣向は似通ってしまったけれど、退屈はさせないように、こちらではふた品用意させて貰ったわ」

杯は、薄く黄色に色付く酒精が八分。

そして、皿には紅葉の天麩羅が盛られていた。

「……ナイフとフォークのほうがお好みかしら？」

「結構よ。和食は嫌いじゃないの」

吸血鬼が神社に通い詰めていることを知った上で、あえてこんな事を言うあたり、月の頭脳も相当に性格が悪い。

まずは小さな杯の中身を示し、永琳が言う。

「重陽はもう過ぎてしまったけれど、月と言えば菊杯先程のメイプルワインに比べると、少し甘さに欠けるかもしれないわね」

「ふん……」

薄黄色の酒精に軽く口をつけ、レミリアは、続いて朱塗りの箸を取った。形よく揚げられた衣をつまみ、かるく苦笑。

「まさか、霊夢のところ以外で草木を食べる羽目になるなんて思わなかったわ」

「塩漬けにしてえぐみは抜いてあるわ。桜の花も食べるものでしょう？」

「……風流つてのも大変なのね。巫女はもつと大変なのかしら」

永遠に幼き紅い月の口元で、ぱりつ、と心地よく乾

いた衣の音が響く。

レミリアは小さな口で、少しずつそれを噛み、飲み込んでゆく。彼女がひと通りの品に手をつけたのを見計らい、永琳は話を締めくくった。

「如何かしら。どちらも秋の品としては十分。そして特に眼精疲労に効果のある品ね。月の光に眩む眼も、時には休めることが大切よ」

「そうね」

箸をからんと放り、レミリアは自分のグラスを手にとった。もう一杯、ブラッディフレーザーの垂らされたメイプルワインを、口直しとばかり口に運び、

「こういうのはそこで扱き使われてる兎にでも食べさせてやるべきなんじゃないのかしら。まったく、月の民つてのは実に陰湿だね」

「あら、どういふこと？」

「どうもこうもない」

かたん、菊酒を満たしていた杯が、紅い爪にはじかれて倒れ、中身をこぼす。が、輝夜はそんなレミリアの不作法をとがめる様子もなく、笑みを浮かべた。

「お口に合わなかったかしら？ 折角たつぷり甘くしてあげたのに」

「失礼ながら」



これまで沈黙を保ってきた咲夜が、一礼して前に出る。

「——仮にも月の姫ともあろう方が、自らの邸宅に招いた賓客を殊更に子供扱いするのは、些か無礼が過ぎるかと思えますわ」

次の瞬間、その纖手には銀のナイフが出現していた。「まして、レミリアお嬢様に月に酔うことを自重せよ、などというのは愚の骨頂。論外かと存じます」

「あら。氣遣いのつもりだったのに」

無言で凶器を握るメイドを前に、なお余裕の表情でころころと笑う輝夜。

吸血鬼とそのメイドは、永遠亭側の出した品が、紅魔館側を明らかに侮辱したものと見抜いたのだ。

梅酒の要領で、菊の花を氷砂糖と一緒に漬けたんだ。酒。そして同じく、砂糖漬けの紅葉の天麩羅。どちらも甘さたつぷりの『子供向け』のものだ。

菓膳として十分な効能を持つとは言いが、吸血鬼の眼をいたわるといふことは、つまりお前たちは月下に相応しくないという意味。レミリアがそれに気づけなければ間抜けと馬鹿にでき、氣付けば皮肉である。

「そもそも、この河上の宴席からしてどうかと思うのですけれど？」

「それは失礼を。心地よく過(すご)してもらおうと思って用意したのだけど、お気に召さなかったかしら？ お日様だけでなく流れる水まで恐れるような主を敬愛する従者も大変よね」

「——」

「咲夜」

鋭く名を呼ばれ、わずかな逡巡を見せながらも、完璧で瀟洒な従者はレミリアの制止に従う。

ざわり、不穏な空気を漂わせ始めた会食の席で、夜の王は静かに口を開いた。

「戯言に付き合うことは無い。……千年も逃げ隠れているとそれはそれは陰口が得意になるようね」

「あはは、あんな珍妙なロケットの披露宴を盛大に開く吸血鬼の度量はさすがね。挙句、手が足りず巫女に縋(すが)ってまで打ち上げた結果があれじゃあ、笑い話にもならないわよ」

「……はっ。どれだけ多くの者を動かし、慕われ、敬われているかが主としての器よ。長いことモラトリアムで帝王学の基礎も忘れていたのか？」

「そうよね、見栄張(か)って役に立たない妖精ばかり集めて、頭数揃(そろ)えているだけじゃあねえ」

「ふん。ここの小間使(こまどつかい)いが従っているのは、表にいた

兎なんだろう？ 禽獣風情でも誰が偉いかよく分かつてるってことじゃないか」

おとなげないやり取りの応酬で、もはや決定的に場の雰囲気は破壊されていた。

だいたいレミリアと輝夜、双方ともが相手に勝ちを譲る気はさらさらなく、審判者のいない宴で高尚に勝負が決する事は稀である。5回に4回はこうして弾幕勝負になだれ込むのだ。初めは渋々付き合っていたパチュリーが呆れて同席を避けるようになった理由もそれであつた。

牙を覗かせる吸血鬼に、月の従者は弓を手に腰を浮かせる。今度はレミリアも咲夜を止めない。

じりじりと高まる一触即発の気配のなか、兎達はそそくさと避難を始めていた。気付けば、竹林の宴席には睨み合う彼女達しか残されていない。

そんななか、均衡を破つたのは従者の弓でもメイド長のナイフでも、姫君の神宝でも吸血鬼の槍でもなく、「——どっちもそこまでにしときなさい」

ふわふわと宙を漂う真上から投げかけられた、半分呆れたような仲裁の声。

一同が思わず空を振り仰げば、そこには月を霞める様に空を飛ぶ影が二つ。

「霊夢？」

「おいおい、私は無視か？」

紅白の巫女の隣では、箒に風呂敷包みをぶら下げた魔理沙が軽く手をあげていた。

「なんか面白いことやってるみたいだから、顔出しに来てやつたぜ？」

悪びれもせず歯を見せて笑う魔理沙に、輝夜は呆れた表情で肩をすくめる。

「呼んだ覚えはないけどね。イナバたちは何してたのかしら」

「ええ、努力はしていたようだけど」

輝夜に答えたのはまた別の声。虚空にぬうと開いたスキマから、八雲紫まで姿を見せる。あまりに胡散臭いタイミングでの登場に、永琳とレミリアが露骨に眉をひそめた。

「ひよつとして貴女の差し金？」

「ん？ 宴会は多勢のほうが楽しいぜ。なあ霊夢？」

「いい迷惑よ」

興が覚めたとはかり、レミリアはその場に腰を下ろした。しかし背中では樂しげに羽根がパタパタと揺れていて、主の心情を明確に伝えている。

隣で咲夜が実に寂しそうな、微妙な表情を一瞬だけ

見せた。従者の心主知らずとはこのことだろう。

「月の独り占めは良くないぜ。ぜひ混ぜてくれ」

「あら、お子様には早いと思うけれど」

「そんなことはないな」

紫にまで自信たつぷりに胸を張ってみせる魔理沙。

毒気を抜かれた一同は、半ば諦めと共に席に戻る。

「折角食器まで持参したんだ、ご相伴に預かるぜ」

「なら中身も持つてきなさいよ」

「真心はありったけこもってるぜ？」

そう言う霊夢も思い切り手ぶらではあるのだが、敢

えてそれを指摘する者はいなかった。どこか白けた空

気の中、ぼむ、と小さく手を叩く音が響く。

「じゃあ、たまには私がご馳走させて貰おうかしら」

声の主は八雲紫。皆の視線の中、彼女はおもむろに

隙間に手をつ突っ込み、ごそごそ中を探って小さな巾着

を取り出した。

鼻歌まで交えながらその口紐を解いてゆくと、中に

は薄く金色をした細かい砂が詰まっている。

「なに、これ？」

「月の宴に、さても貴重な一品。月の砂よ」

「……ちよつと。この間の？」

第二次月面戦争の顛末を思い出してか、微妙な顔を

する霊夢。しかし紫は扇子を広げ、

「いえいえ。こんな席で無粋な真似はしないわ。誓つ

てあの時、月から持ち帰ったものはひとつもないもの。

……これはね、表の月の月の砂。<sup>レゴリス</sup>月に辿り着いて思い

あがった人間が、旗を立てるのと一緒に持ち帰ったも

のよ」

紫は宴席の朱杯のひとつを手に取り、そこにまたも

どこからか取り出した酒を注ぐ。

さらにそこへひとつまみ、黄金の月砂を振り入れて、

紫はレミリアと輝夜の前にそれを示して見せた。

「幻想が科学を呑む、これも一つの意趣返しではあり

ますわ。月の民と吸血鬼、揃って呑むなら月の影なん

かよりも、此方のほうが景気が良いのではなくて？」

そう言つてくすくすと笑う紫。

月影ではなく月を呑む……なるほど、境界を操るス

キマ妖怪らしい実に胡散臭い論調だった。

紫の笑顔の前に、月の姫と紅魔の主は、顔を見合わ

せて小さく吐息し、互いに月砂を振り入れた杯を手

取る。

「——貴女の顔に免じておくわ」

「いつぞやの迷惑料、ということね」

二つの杯を交わし、勝負の結末を有耶無耶に。

「ここはひとまず手打ちという雰囲気になった中。霊夢たちも思い思いに朱杯を手取る。酒精を干し、さかづきの底に残るひとつまみの砂をさりつと嘯み、

「月の風味ね」

「月味だな」

「あら、月のお酒はもつと洗練されているわ。これで月の味だと思われるのは心外よ」

いつしか、すでにいつもの宴席となりつつあった。

「いい月だねえ」

どこから来たのか河床の端にはごろりと寝転がる酔いどれ鬼の姿まで。頬をほんのりと紅く染め、瓢箪を傾け、月砂を注いだ大きな杯をくいと煽る。

「あ」

「いつの間に」

「固いこと言いつこなし。宴会のにおいがあればどこにだって、つてね。独り占めはよくない。みんなも萃めてあげたから」

「はあ……ったくもう」

呆れる霊夢も、すぐに気を取り直して食事に手をつけ始めた。食べるものが紅葉の天麩羅くらいしかないことにあれこれ不平を言いながらも、レミリアが咲夜に命じて用意させた料理に箸をつける。

「あら、あなたは付き合わないの？」

空の杯に口を付けたまま、しかつめらしい顔をしている魔理沙に、輝夜が声をかけた。

「いや、ちつとな。よく考えたらこんなの呑んで平気なのかと思つてな……」

蒐集家としての好奇心と、禁忌なる月に対する魔法使いとしての直感からか。じつと杯を見つめる魔理沙に、輝夜は小さく微笑む。

「そうね。あまり良くはないんじゃないかしら。特に人間にはね」

「おいちよつと待て輝夜、おどかすな。気味が悪いぜ」  
「ふふ。まあ夢じゃなくつて良かったんじゃない？」

「夢……？」

魔理沙はしばし首を捻り、はたと気付いたように頬を赤くして顔を上げる。

「つておい、紫!!」

「ふふ、だから言つたじゃないの。お子様にはまだ早いつて。……朋に月見る月は多けれど、よ」

微笑む紫は隙間に引っ込んで魔理沙から逃れると、空に掲げた月杯を傾け、朱に染めた頬をふと緩ませた。

### 三月方浄土と彼の岸辺

▼蓬萊山輝夜&小野塚小町&藤原妹紅

「ん……？」

ぎし、ぎし、と耳障りな音と共に、不安定に揺れる身体。背中の感触はお世辞にも柔らかいとは言えず、腰まで痛い。寢覚めは最悪の部類だった。

「永琳、……ねえ、永琳、いないの？」

寝起きにぐらぐら揺れる頭を振って、輝夜は従者の名を呼ぶ。

が、そこで聞きなれた人意永琳の声が答えることはなく――

「ああ、やっとお目覚めかい」

代わりに、やけに馴れ馴れしい赤毛の死神が、ぼんやりとした視界のなかに映る。

ちやぷ、と揺れる水音を聞きながら、輝夜は細めた目を眠そうに開き、頭を擦って身体を起こした。

永遠と須臾の姫君、蓬萊山輝夜が目覚めたのは、柔らかな布団の中でも、退屈のままに転寝をしてしまっ

た炬燵の中でもなく。小野塚小町が櫂を握る小舟の上。いわゆる三途の河の上であつた。

「ええと」

いまいち事態が飲み込めず、輝夜は眉をよじらせてあたりを見回し、目を閉じて、深呼吸をひとつ。困ったことがあればまずは素数を数えて冷静に事態を把握しろ、というのは永琳に言い聞かされていることだ。結局それでも何故こんなところに居るのかは分かんなかったが、すべきことはすぐに理解できた。

「とりあえず吹っ飛ばしておけばいいかしら」

「いやちよいと待てお姫様」

ごそごそと懷から蓬萊の珠の枝を取り出した輝夜を、小町が慌てて制する。

「なんだいその乱暴な結論は？」

「決まってるでしょ？ 帰るのよ」

「どこにだい？ 悪いがあんたにやもう帰る家はなによ」

呆れた表情の小町を見上げ、輝夜はかるく船の上を後ずさり、胸元を不安げに押さえて眉をひそめる。

「……誘拐？」

「あのねえ。……もちつと普通に考えなつて。ここは三途の河で、あたいは死神だ。そうなりや自分がどう

なったかくらいはわかるだろう？」

「生憎だけどさつぱり分らないわ」

心底不思議そうな顔で首をかしげる輝夜に、小町は一目瞭然だろうとばかりに肩をすくめてみせる。

「死神が用事つたらひとつだけさ。いいかい、死んだんだよ、お前さんは」

「……………どうして？」

悲しいかな、絶望的なまでに話が噛み合っていないかった。

だめだこりやと呟くと、小町は櫂を放し、舳先にひよいと腰を下ろした。漕ぎ手が居なくなっても小舟はそのまま、ゆつくりと波の無い河面を進んでゆく。

だったら始めから漕がなくてもいいだろうにな、と輝夜は思ったりした。

「つまりだお姫様、人間、生きてりやいつかは死ぬものなのさ。まあ確かに急のことだ、分からんでもないけどね。普通は棧橋から始まるもんだし。幸いここはそういうための場所でもある。あんたもじつくり考えて、死を受け止める時間をつてね——つてだからなにをやってんだ!？」

舟から飛び降りようとしていた輝夜を見つけ、小町は慌ててその襟をぐいとひつつかむ。引き戻された身

体は舟の上に倒れこみ、小舟はぐらぐらと揺れ動く。

「…………けほ。ちよつと、離してよ誘拐魔」

「あーもう、だから違うって言つてんだろうに!! 落ちたら浮かんでこれないんだ、この河はっ」

「あなたこそ何を勘違いしてるのか知らないけれど、私はこんな所の世話になる気はないのよ」

その通り。何故なら、蓬萊山輝夜は不老不死であるからだ。永遠と須臾を操る程度の能力と、月の頭脳の叡智の結晶にて精製された蓬萊の薬。

一度手を出せば大人になれず、二度手を出せば病苦も忘れ、三度手を出せば永遠の苦輪に悩み続ける。

その、筈なのだ。事実これまで何度も死ぬような目に遭い、そのたびに死なずに生きてきた。蓬萊の薬とは、そういうものであるはずだ。

「…………おいおい、ここまで来といてそりやあないだろう。現にあんたはあたいの舟に乗ってる。こいつはね、死後の魂以外は乗れないようになってんのさ」

死神は呆れたように後ろ頭を搔く。

「最近冥界の管理も緩くてアレだがね、いまさらやゝめた、で帰られちゃそれこそ三途の意味がない。これは例外なく決まってることだね。無視されちゃあたいの立つ瀬もないってんだ」

「でもねえ、私、死なないはずなんだけど」

「そりゃあたいに言われたつて困る」

なんかあったんだろ、と実に適当な事を言つて、小町は櫂を握りなおした。

再び、小さく音を軋ませて、死神の操る小舟が河面の上を滑つてゆく。

しばらくその舳先を見つめ、ふうと吐息をひとつ挟み、輝夜はとりあえず舟の上に腰を下ろす。

試してはみたがなぜか不思議と飛ぶこともできなくなつていた。死神に気付かれないようにこつそりと動かしてみた神宝も、その力を發揮しない。おとなしくをせざるを得ないというものだろう。

「……納得できたかい？」

「まあ、私が死んでるかどうかはおいておくとして。……なんでここに居るのか全然思ひ出せないんだけど」

それで納得なんて言われても困るわ、と輝夜は口を尖らせる。

「そんなの変じやない。死んだ人間つて、その時の事を覚えてないものなの？」

「そいつは場合によるね。死因に関わらず、自分が死んだことを理解できない魂つてのは居る。はつきりと

死を自覚できてるやつは、生前の姿をしてないことが多いね。たまに見るだろ、あの白くてふわふわした魂あれがそうさ。自分が死ぬ前と違うことを受け止めて、そうやって現世との未練やら迷いを断ち切るんだ。逆にお姫さんみたいに、身体の重さも感じられて、モノに触れることができたりすると、死んだのを自覚するまでにえらく時間がかかる」

「へえ」

「……人がせっつかくやる気出して解説してやつてんだからちつとは真面目に聞きなつてのに」

「興味ないんだもの」

実際、どうでもいい話と言えば本当にどうでもいい話だ。輝夜は手のひらを頭上にかざし、開いては握る。仮に自分が魂だとして、そこにはもう何も無いのだと言われても、確かに感じる手指の感触は、とても気の迷いとは思えない。

「で、死んだ人間の罪を図るのがこの河さ。魂はみんなここを渡っていく」

「知ってるわ、あなたの上司のところでしょう」

「言つとくけど、仕事に私情は挟まないひとだから顔見知りだからつて気安く話しかけたりしないようにしなよ。……裁判の法廷で反省してないのはよろしく

ないからねえ」

「裁判ねえ。悪いことしたのかしらね、私」

「……とりあえず、何回人殺しをしたのか考えてみちやどうだい」

「死んでないじゃない」

小町が言いたいのはわからなくもない。……けれど、死なない相手を何百回殺して、それがいつたいたいのなんの罪になるというのだろう。

輝夜が首をひねっている間にも、ぎ、ぎい、と櫓を軋ませ、小舟は広い河面を進む。

ゆらりと見えた黒い影は、この河に棲む旧い旧い魚の幽霊だという。イナバの一匹がそんなことを言っていたな、というのをなんとなく思い出し、輝夜は目を閉じた。

しばし、死神が舟を漕ぐ音だけが沈黙を埋める。

が、すぐに退屈になって輝夜は小町を振り返った。

「ねえ、まだ着かないの？」

「さてね。少なくともお姫さんの場合はまだ掛かるんじゃないかね。……ほれ、いつだったかスキマ妖怪の式が解明したろ。三途の河幅は、渡る魂の罪によつて決まるのさ」

「だから、私悪いことなんかしてないわよ？」

「……人殺しだけじゃないさ。自殺もそうだが、天命を捻じ曲げちまうのは大体にして良くない事だ。あんたは永遠を生きる不死の姫だろう？ 死なないってことは、それだけでも罪なのさ」

「そんなもの、穢き地上の罪でしょう」

関係ないわ、と輝夜は言う。

「初耳だね。月人にや、別の地獄があるのかい？」

「そんなものないわ。月に還るのよ」

それを、本当に信じていたわけではないけれど。

でも、長い長い日々の中で、輝夜は確かにそう思っていた。

「月には地上で使われなかった才能や、叶わなかった夢が沢山仕舞われているの。地上にあつて穢れることを嫌ったものは全部月に集まったわ。だから豊かなところなのよ」

だから、空に在って浄土となつた。月とはそういう場所なのだ。

「んじゃあ、どうしてお前さんはそんなご立派な月を捨てたんだい？」

「……………」

「つと。ちいと揺れるよ」

輝夜が答える前に、小町がそう言つて深く櫓を動か



す。

ぐん、と流れを曲がつて、小舟は波の大きな場所へと出る。河面には小さな島があり、そこには一面に紅い花が群れ咲いていた。静かに風が吹き、紺色の空に伸びる紅い花が揺れる。

「聞いている限りじゃ、月つてのは素晴らしいところだそうじゃないか。あの八雲紫が攻め込もうつて思っくらいだ。お前さんの言うとおり、豊かで綺麗な場所なんだろうねえ。それこそ、迎えに来た連中まで返り討ちにして、千年も隠れ潜んで、逃げ回つてたんじゃない？ 屈に合うまい？」

「……説教臭いのは閻魔のほうで、死神は怠け者だつて聞いてたのに。ずいぶん熱心なのね」

「今日のところは真面目に仕事してると言つたろう？ お前さんみたいなのはいろいろ大変だよ。いつまで経つても彼岸が見えないからね。……まったく、死ねないつてのは罪深いことだね」

「きや。ちよつと、もう少し静かに動かしなさいよ」  
ぐら、と舟が揺れる。危うく倒れそうになつて輝夜は縁を掴み、声を上げた。

しかし小町は、一向に介せず權を握つたまま。振り向くともしない。

「お前さんの言うとおり、一人で死ねなきやそれは罰だ。あたいの出る幕でもないし、沙汰もなにもあつたもんじゃないさ。けどねえ。死なない生命がひよこひよこ仲間を増やされちゃ、いろいろ拙いんだつてことさ。……ま、丁度いい機会だ。予行演習も兼ねて、少しは考えておくといひ」

また大きく舟が揺れる。なにか大きな渦にでも巻き込まれたのか、輝夜はどうとう舟の上に投げ出され、悲鳴を上げる暇も無く上下左右に揺さぶられる。

いつしか小舟の先の小町の背中が遠ざかり、周りが緩やかにぼやけて――



「――い、おい、輝夜、おいっ!!」

がくがくと揺さぶられる視界が、ぼんやりと焦点を結んでゆく。さつきまでの光景が嘘のように、はつきりと実感を伴つた身体の重さが感じられた。

肩を掴む、熱くて力強い手。燃えるように猛る心。そうして、すくと抜け落ちていた記憶が喉元から腹の底に落ちてくる。

「あれ、もこたん?」

「……………」

目を開けた輝夜に、がつくりと脱力するように、妹紅は大きく息を吐いた。肩を掴んでいた手を離し、気が抜けたようにどさり、とその場に腰を下ろす。

そんな妹紅のやけに必死な形相が可笑しくて、輝夜はくすりと笑った。

そう。何のことはない、いつもの夜毎の殺し合いの最中だった。どうした具合だかいつものようにスペルカードを宣言したところでふと気が遠くなって——

「つたく、もこたんじやないつての。……人騒がせな」  
「なあに、ひよっとして心配しててくれたの？」

「違っつ!!」

即答で叫ぶ妹紅。幾分紅いようにも見える顔を、反らしながら早口で、

「なんなんだ、急に動かなくなるし……畏かと思つてたらなんも反応しないし、適当に四、五回焼いてみたのに逃げる様子もないし」

「そうね。変な夢だったわ」

つぶやいて、輝夜は身体を起こそうとし——そのままかくん、と地面に突つ伏した。手足にまるで力が入らず、まるで骨のない肉を継いでいるようだ。

「おい、輝夜？ なにやってんだ？」

「……………」

しばしもがいてから、輝夜はふう、と吐息をひとつ。よく分からないけど、起き上がれないみたい」

「おいおい」

「大丈夫よ、たまにあるんだから」

顔色を変える妹紅に適当に答えて、輝夜は重い身体を引きずってごろんと寝返りを打った。仰向けになりながら、ほほをくすぐる下生えの感触に目を細める。

「途中だった気がするけど、まだやるの？」

「そりゃこつちの台詞だ。……だいたい待つてやつてたのこつちだろ」

「そうね、なんか気が抜けちゃったわ」

さらに、と波打つスキの海原を見、輝夜はしばし、妹紅の言葉を待った。

が、妹紅もなにを遠慮しているのか一向に何も聞いてこないの、結局自分から話す事にする。

「なんだか分からないけど、三途の河を見てきたわ」

「あの、ぐーたら死神のか？」

「ええ。結構、珍しいものを見たのかもね」

たぶん、一生縁のない場所だろう。そう思つてみれば、貴重な体験かもしれない。

「……死なないんじゃないのか、おまえ」

「だから、こうやって戻ってきてるじゃない」

おかしいわ、殺そうとしてたくせに、と輝夜は笑う。

——けれど、それは少しもおかしくはない。生きていなければ、殺そうとなんてしやしないから。

「だいぶ涼しくなったわね」

さらさらと、風に波打つススキの穂。月の海とはまた違う、黄金色の波間。あと数日もすればやってくる中秋の名月にもさぞ映えることだろう。

「暑さ寒さも彼岸までつて言うしな」

「それじゃあ、私はいつまで経つても涼しくならないじゃない」

口を尖らせる輝夜に、妹紅はあのなあ、と頭を掻き、

「わがまま言うな」

「それがお姫様の仕事なのよ」

よく知らないけどね、と呟いて、輝夜はもういちど寝返りをうった。

と、そこで視界の端に見覚えのある紅い花を見つけ、輝夜は妹紅の袖を引っ張る。

「ねえ」

「どうした？」

「あれ、取ってきて」

「は？」

「いいから。動けないのよ？ 私」

「……なんなんだお前は」

妹紅はぶつぶつと文句を言いながらも、意外と素直に輝夜の言葉に従った。月下に群れ咲く緋色の曼珠沙華から一輪を摘み、戻ってくる。

緑の細い茎から放射状に広がる花弁は、まるで赤く咲いた血の仇花のよう。手渡された緋花を見、妹紅によく似合うわ、と輝夜は思った。

「……で、彼岸花がどうした？」

「それがいつぱい生えてたの。三途の河岸に」

「……生と死の境界に咲く花だからな。そういや前に聞いたことがあるな。彼岸花は株でしか増えないんだそうだ。種ができないんだとかで」

「へえ……」

境界を隔てる花を覗き込み、輝夜はふと思ひ浮かんだ疑問を口にする。

「ねえ妹紅」

「あん？」

「あなた、子供欲しいって思ったことある？」

「……きゆうになにいつてんだおまえ」

至極普通のことを聞いたつもりだったが、妹紅にはどうもあまりに想定外な質問だったらしい。返事が平

仮名などところを見るに、相当に動揺しているようだった。予想外の反応に、にいと笑顔を見せながら輝夜は妹紅の顔を覗きこむ。

「なによ、今更そんなの恥ずかしがる歳じゃあないでしように、お互い。もう何百回も、軀の内側の奥の奥まで、ぜんぶ見せ合つた仲じゃない」

「だからおまえはな」

頬を突つついてからかつていたところを、ごちんと頭をひっぱたかれ、輝夜は思わず声を上げる。

「いったーい!? なによ、もこたんの乱暴者ー!!」

「ああもうだからつてお前はなあ!!」

変なところで純情だな、と呆れかける輝夜だが、よく思い出してみれば、出生の怪しさはともかくこいつだつて藤原不比等の娘なのだ。本来はそんな態度のほうが普通なのかもしれない。

「……つたく、なんなんだ唐突に」

「不死人の子供は、死なずに生きてくれるのかしら、つて思つたのよ」

良くはわからないが、三途の河で死神に説教されるというのは、まあたぶん、生きていることを理解しろ、という意味だろう。違つかもしれないが輝夜はそう思うことにする。

「知らんが、多分無理なんじゃないのか」

「そうよね」

薄く笑う妹紅に、輝夜も頷いた。

「本当に、難儀なもんねえ。死なない、死ねない、死のない。生まれ生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く死に死に死に、死んで死の終わりに冥し、か」

閻魔も困るわけね、と輝夜は大きく伸びをひとつ。

「ねえ、妹紅」

「あん？」

「そろそろ帰りたいんだけど」

「……なんだその手」

「気が利かないのね。動けないから、送つて頂戴」

「おまえな」

つくづく図太い奴だな、などとぼやきながらも、律儀に抱きかかえようとしてくれる妹紅の胸に、そつと額を寄せて。輝夜はそつと目を閉じる。

「本当に、野暮で困るわね。妹紅は」

「何言つてんだひきこもりめ」

空に在る月は、悠然とその銀光を地上へと投げかけ、真円の縁に輝きを満たしていた。

あとがき

お手にとつて頂きましてありがとうございます。当サークル三冊目の東方SS本「月の砂漠にはるばると」をお送りしました。ページ減ですが内容はいつもに比して多めでございます。窮屈で読み辛かったら申し訳ありません。

永夜抄は天に浮かぶ幻想の象徴であり、384,400kmを隔てて地球を周回する衛星である月を軸に外の世界と幻想郷が関係し合うお話でありまして、作中でも様々な人妖の思惑が入り混じり見え隠れする構造となっております。

収録の3編もそれを意識したものにしてみましたのですが、いかがでしたでしょうか。未熟ではありますが、どうか少しでも楽しんでいただければ幸いです。

まだ先の話となつてしまいますが、当サークル今後の活動としては、十月に大阪、諏訪。さらに十一月の九州と各イベントに参加してゆく予定です。

もし旅先で見かけるようなことがありましたら、一声かけて頂ければ嬉しく思います。

今回の発行にあたっては監修・設定考証として白身氏、デザインと装丁にRiza氏の全面的なご協力をいただきました。この場を借りて深く感謝を申し上げます。

——それでは。  
また次の機会にお会いできることを願つて。

「月の砂漠にはるばると」

発行 平成21年9月22日 月の宴2

オルハザカサンパンチ  
折葉坂三番地

あかがね  
銅 おりは

<http://oruhazaka.blog28.fc2.com/>  
<http://members.jcom.home.ne.jp/oruhaindex.htm>

As I take man's last step from the surface, back home for  
come, but we believe not too long into the future. I'd like  
what I believe history will record, that State's challenge  
forged man's destiny of tomorrow. And, as we leave  
Taurus-Littrow, we leave as we came and, God willing,  
shall return, with peace and hope for all mankind.  
the crew of Apollo 17.

